

令和 4 年 6 月 20 日

(※受付番号 )

教 育 長 様

代表者 校 園 名 : 大阪市立長原小学校  
 校 園 長 名 : 市場 達朗  
 電 話 : 06-6708-0105  
 事 務 職 員 名 : 石澤 綾子  
 申 請 者 校 園 名 : 大阪市立長原小学校  
 職 名 ・ 名 前 : 主務教諭 相井 夕子  
 電 話 : 06-6708-0105

研究コース
A グループ研究A
校 園 コード (代 表 者 校 園 の 市 費 コード)
751732

### 令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究 (1年目)
2	研究テーマ	<b>人権教育としてのインクルーシブ教育のあり方 — 誰一人取り残さず、みんながいきいきするために —</b>			
3	研究目的	テーマに合致した目的を端的に記載してください。 ○人権のための教育「人権を大切に社会や個人を育てることを目的とする教育」のため ○人権としての教育「教育を受けることそのものが子どもの人権・育つ権利の保障」のため ○人権を通じての教育「日々の学校生活が人権を大切に作る雰囲気の中で営まれ教育の方法や内容が「人権を大切に作る」という考え方と合致する教育」のため ○人権についての教育「人権のことを直接の内容とした教育」のため ○先進的研究校への視察を企画・実施しともに学ぶことで、大阪市全体へ発信 ○先進的研究校から講師招聘した講演会を企画・運営し、大阪市全体へ拡大 ○各種研修会を開催し、研修内容を実践に取り入れることで教員の資質向上を図るため			
4	研究内容	継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。 人権教育としてのインクルーシブ教育の基本的視点は、 ①子ども主体の教育を創造する。 ②子どもを取り巻く人権文化を構築する。 ③子どもがエンパワーする(自分らしく生きる)教育をめざす。 ④「自立と共生」の関係をつくり出す。  <b>①「ともに学ぶための支援」の研究(算数科の授業を通して)</b> ・障がいのある子どもと障がいのない子どもが同じ場でともに学ぶことを追求するとともに、障がいのある子どもの自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を研究する。算数科の「入り込み支援のあり方」について「主語を子どもに変える」実践を行い、講師先生からの指導・助言を受ける。(講師:東京大学 小国喜弘 教授) <b>②「ちがいをみとめ合う」実践の研究</b> ・体験的な出前授業を取り入れ、障がいをもつ人への理解を深め、ちがいをみとめ合える豊かな人間性の育成に取り組む。(日本福祉学習センターとの共同学習) ・隣接する平野支援学校との交流を通して、互いを知り、互いを認め合える交流学習に取り組む(各学年2回 平野支援学校との共同学習) <b>③「自分がつくる(自分らしく生きる)学校」の研究(先進校の視察や研修を通して)</b> ・安全・安心な場を自分たちでつくる、自分たちの学校をつくる、コミュニティをつくる、仕組みをつくる、ルールをつくる、自分をつくる、そんな子どもも大人もつくり手であるイェナプラン実践校やインクルーシブ教育実践校から学ぶ。 (長野県南佐久郡大日向小学校・広島県福山市立常石ともに学園)(大阪市立大空小学校) ・「子どもも大人もいきいきしている学校」づくりのために講師招聘をして研修の充実を図る。(湘南学園長 住田昌治先生・ALL HERO s 徳留宏紀さん) <b>④「個別最適な学び」と「協働的な学び」の研究(先進校の視察を通して)</b> すべての子どもたちの可能性を引き出す、「個別最適な学び(自立)」と「協働的な学び(共生)」の実現に向けて先進校から学ぶ。(愛知県知多郡東浦町立緒川小学校)			

研究コース  
代表校園

A グループ研究A  
大阪市立長原小学校

代表校園コード  
校園長名

751732  
市場 達朗

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>6月 研究テーマ・目的・内容・見込まれる成果等の検討、算数研究授業（学年1本） 支援学校との交流学習</p> <p>7月 算数研究授業 研究協議会 支援学校との交流学習 ちがいを認め合う学習</p> <p>8月 先進的研究校への視察・まとめ 子どもも大人もいきいきしている学校づくり研修・非認知能力研修</p> <p>9月 算数研究授業 研究協議会 入り込み支援研修 先進的研究校への視察・まとめ 支援学校との交流学習 ちがいを認め合う学習</p> <p>10月 算数研究授業 研究協議会 入り込み支援研修 先進的研究校への視察・まとめ</p> <p>11月 算数研究授業 研究協議会 入り込み支援研修 先進的研究校への視察・まとめ 支援学校との交流学習</p> <p>12月 子ども・サポーターのアンケート実施 支援学校との交流学習</p> <p>1月 研究発表会（講演会）【講師：東京大学教授】</p> <p>2月 支援学校との交流学習 研究のまとめ作成</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<b>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</b>および<b>教員の資質や指導力の向上</b>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p><b>【見込まれる成果1】</b> 算数科の授業実践を通して、困っている子どもへの支援について考え、問題解決に積極的にかかわり合え、友だち同士の学びの中で成長する児童の育成をめざす。</p> <p>《検証方法》 子どもアンケート項目「問題を解く前にどうやったら問題を解くことができるかを考えることができましたか」で肯定的割合を80%以上にし、「自分も人も大切にしている」や「自分で考えて行動している」で肯定的割合を80%以上にする。</p> <p><b>【見込まれる成果2】</b> 人権教育の実践研修を通して、教員自らの人権感覚を養い、「子どもから学ぶ大人」として人権意識を向上させ、教員としての資質を高める。</p> <p>《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は子どもたちが話すことをよく聞いている」や「学校は子どもたちのために、様々な取り組みを積極的に行っている」で肯定的割合を80%以上にする。</p> <p><b>【見込まれる成果3】</b> 子どもとともに学ぶ大人として、大人自身が「自分が学校をつくる」意識を向上させ、「笑顔で元気に楽しく」をモットーに教員としての資質を高める。</p> <p>《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は子どものことをよく考え、明るくいいききと関わっている」や「子どもたちは学校へ行くことを楽しみにしている」で肯定的割合を80%以上にする。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p><b>【見込まれる成果4】</b> 「個別最適な学び」や「協働的な学び」の研修を通して、子ども主体の学びを追求し、教員の指導力の向上を図る。</p> <p>《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は工夫して、わかりやすい授業をしている」で肯定的割合を80%以上にする。</p> <hr/> <p><b>【見込まれる成果5】</b></p> <p>《検証方法》</p>				
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 <b>報告書提出日（令和5年2月24日）までに必ず行ってください。</b></p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="405 972 1075 1043"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 5 年 1 月 27 日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立長原小学校</td> </tr> </table> <p>◆代表校舎HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 5 年 1 月 27 日	場所	大阪市立長原小学校
日程	令和 5 年 1 月 27 日	場所	大阪市立長原小学校			
8	代表校舎長のコメント	<p>1990年代から国際社会でインクルーシブ教育が叫ばれるようになり、「特別な教育的ニーズ（必要性）を持つ子どもたちは、彼らのニーズに合致できる児童中心の教育学の枠内で調整する、通常の学校にアクセスしなければならず」（サラマンカ宣言）との理念が広がった。</p> <p>同じ教室で一緒に学ぶことがもちろん望ましいけれど、それだけだと、障がいのある子が勉強についていけなかったり、自立に向けた支援もじっくり受けられなかったりするから、別の学びの場所も用意しておきましょうとなる。このことは一見すると合理的な配慮であり、ある面で必要な部分もあると言える。しかし、インクルーシブ教育の本質的な理念から問い直し続けることなしに、特別支援教育の現状に頼り切ってしまうと、結果として、合理的な配慮でなく、合理的な排除につながってしまうのではないかと危惧される。</p> <p>こうした現状への有識者の見解を学ぶことや、すべての子どもの学習権が保障され、心理的安全性のある先進校からの学びは、貴重な体験や経験となり、教員の資質や指導力の向上につながると思う。</p> <p>インクルーシブな教育といっても、一つの理想やゴールがあるわけではない。「どうしたらともに学び、ともに育ち、ともに生きていけるのか」との問いを絶えず繰り返しながら進むのではないかと考える。</p>				